

これまでの出会いや
経験があつてこそ、
今の僕があるんです

元プロ野球選手

松井秀喜さん



長嶋氏と共に国民栄誉賞を受賞。授与式は2013年5月5日、ファンが集う東京ドームで行われた

写真：読売新聞社 / アフロ

略歴／まつい・ひでき

1974年石川県生まれ。星稜高校時代、甲子園に4度出場。右投げ・左打ち。93年にドラフト1位指名で読売巨人軍に入団。2002年にFA（フリーエージェント）権を行使してニューヨーク・ヤンキースと契約。06年5月に左手首を骨折するまで日米通算1768試合連続出場。09年には完治しない怪我と闘いながらワールドシリーズを制覇しMVPを獲得した。翌年以降はロサンゼルス・エンゼルス、オークランド・アスレチックス、タンパベイ・レイズで主力バッターとしてプレーし、12年のシーズン終了後に現役選手を引退。現在は次の飛躍に向けて充電中。



写真：アフロ

2013年5月、元読売巨人軍監督の長嶋茂雄さんと共に国民栄誉賞を受賞した松井秀喜さん。同年7月に行われたニューヨーク・ヤンキースの引退セレモニーは、日本のみならず米国の野球ファンやチームメートから、松井さんがいかに愛された存在であったかを強く印象づけました。本企画では、松井さんの生い立ちや野球人としての軌跡をお聞きし、数々の挫折を力に変えてきた「人間・松井秀喜」の魅力に迫りました。

**努力できることが才能。
父の言葉を胸に野球の道へ**

宗岡 国民栄誉賞の受賞、改めてお祝い申し上げます。本日は松井さんの少年時代からの軌跡を辿り、「個人タイトルよりもチームの勝利」を重視する姿勢や逆境に立ち向かうときの心構え、子どもたちや被災者へのチャ

リティ活動のお話などを通じてお人柄に近づき、今後の日本を背負う若者や世界で頑張っている皆さんへのメッセージをいただければうれしく思います。

今回お会いすることが決まり、ご実家（石川県能美市）にある「松井秀喜ベースボールミュージアム」を見学しました。お兄様が設計された館内を、お父様にゆつくり案内していただきましたが、当日は日曜日で、バスで来た大勢の野球少年が目を見張らせて見学しているのが印象的でした。

新日鉄住金(株) 会長兼CEO 宗岡 正二



写真：松井秀喜ベースボールミュージアム

兄たちとの三角ベースボールで歓声をあげた自宅前の広場。日本三名山の一つである白山を望む田園風景の下、伸び伸びと育った



写真：松井秀喜ベースボールミュージアム

「僕には夢がある」と書かれたパネル。ミュージアム入口に飾られている

松井 お忙しいなか、石川県まで足を運んでいただきありがとうございます。

宗岡 ミュージアムを拝見して、松井さんの野球選手としてのすごさだけでなく、ご両親の教育や家庭環境が現在の松井さんの人格をつくりあげたのだと感じました。まず、ご家族とのエピソードを含め、どのような少年時代だったのかお聞かせください。

松井 先に野球を始めた兄たちと一緒に三角ベースボールをやるようになりました。田舎で遊びと言えば野球しかない時代で、4学年離れた兄に追いつきたい、追いつきたいという気持ちでした。もともとは右利きですが、兄が左利きで、憧れていた阪神タイガースの掛布雅之さんも左打ちだったのでまねをしていたら、だんだんそのほうが打ちやすくなって…。

宗岡 少年時代、お父様から贈られた裕伊之助^{はな}(※)の「努力できることが才能である」という言葉を半紙に書いて自分の部屋に貼られていたそうですね。

松井 父の好きな言葉です。努力できることが才能であれば、ある意味で誰にでも才能はある(笑)。子どものころはその意味を深くは考えませんでした、今になっていい言葉だと感じています。

宗岡 将棋棋士の羽生善治さんも「才能とは一瞬のひらめきやきらめきではなく、情熱や努力を継続できる力だ」と。松井さんが小学生時代の石川県大会で3位になられた柔道の世界でも、嘉納治五郎師範[※]が「力必達^{ちから}(力むれば必ず達す)」という言葉を残しています。一事を成し遂げるには天分のみならず、日々の努力が大切だと感じますね。

松井 僕はどちらかと言うと一つずつ階段を上り、積み上げていくタイプです。左打ちに変えたせいもあり、常に一つ一つの過程を大事にしていけないとバッターとして良い

形がつかれない。それを常に自分に言い聞かせてきました。決して器用じゃないので、練習でも試合でも何かあったらすぐにチェックして改善する、その繰り返し。もともと右打ちであれば細かいことを考えず自然に打てて、もつといバッターになれたのかもしれないのですけれど。

宗岡 逆に言うと、右打ちだったなら今日の松井さんはなかったかもしれない(笑)。

野球人である前に 立派な社会人であれ

松井 そういう可能性もありますね(笑)。

宗岡 松井さんご自身の努力に加えて、星稜高校の山下智茂監督や読売巨人軍の長嶋茂雄監督、ヤンキースのジョー・トリリ監督など、恩師や指導者からも大きな影響を受けていますね。山下監督はどのような方ですか。

松井 今まで出会った中で、野球への情熱は誰にも負けない人です。指導は厳しく甲子園で全国優勝することを目指していましたが、同時に生徒が卒業して社会に出てしっかりした社会人になれるような人間形成、教育を非常に大切にされています。

宗岡 私は全日本柔道連盟の会長を務めています、ロス五輪金メダリストの山下泰裕副会長も、柔道で強くなることが目的ではなく、引退後の30〜40年、社会人として生きていくための人間性を磨くことが大切だと。礼儀作法にも大変厳しい人です。

松井 山下監督もまったく同じで、細かい生活習慣など基本的なことに厳しい方でした。

宗岡 巨人軍やヤンキースも、遠征などのときは必ずスーツ着用で、身嗜みなど日頃の生活態度にも気を配られていますね。そして巨人軍入団以降は長嶋監督が松井



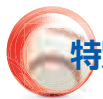
父から贈られた言葉。部屋に貼ったこの半紙を見ながら高校時代までを過ごす。父は松井少年を、一人の人間として敬意を込めて「秀さん」と呼んだ。晩年石川県加賀市に移り住み、九谷焼の創作に没頭した。



物置小屋で父がトスするボールを黙々と打ち込んだ中学・高校時代。その後、父は松井少年にトスマシーンを贈った

※嘉納治五郎 柔道家・教育者(1860〜1938年)。講道館柔道の創始者であり、日本のオリンピック初参加に尽力した功績などから「日本の体育の父」と呼ばれる。





さんの指導者となった。とかく天才型バッターと言われる長嶋監督も松井さんと同様、非常に努力家だと聞いています。指導を受けていかがでしたか。

松井 現役時代、並みのバッターにはまねできないほど日々の練習でバットを振った方だと聞いています。妥協がない。僕への指導でもとにかく「振って、振って」と。おそらくそういう人は長嶋さんだけだと思います。確かにスピードが出て軌道がいいと空気を切る音が違うんです。最初はその違いがわかりませんでした。ボールの下にバットを打ち込むイメージで振り、その音を監督に一本一本評価されているうちに少しずつわかるようになりました。特にボールを捉えるポイントで最もヘッドスピードが出ていたという音が出るんですよ。

宗岡 その音を聞き分けるのは感性の世界ですね。長嶋監督は一流のバッターは手に豆ができませんと言われる。私はゴルフですぐに豆ができますが（笑）。実際に豆はできないんですか。

松井 監督はそうおっしゃっていました。余分な力が入るから豆ができるのだと。実際に頭の中のイメージと体の動きを一致させてリラックスすれば、どれだけ振っても豆はできない。僕もだんだんそうになりました。長嶋監督にはこうした技術的な教えだけでなく、多くの愛情を注いでいただき、大変感謝しています。

宗岡 また中学時代、明らかにボール球をストライクと言

われ、バットを叩きつけてコーチに叱られたというエピソードがあります。その後、92年の夏の甲子園、明徳義塾高校戦での5連続敬遠を淡々と受け止められたのも、そうした経験があったからでしょうか。

松井 いろいろな要因がありますが、中学から高校にかけて、何があっても感情に出さず冷静でいる、道具を大事にするといった教えがあったからだと思います。そういう教えと経験がなかったら、あからさまに感情が出ていたかもしれません。

宗岡 ミュージアムに、その光景を見た作詞家・阿久悠※さんが書かれた詞が飾ってありましたが、あれは素晴らしいですね。

松井 あの詞は当時の僕を本当に励ましてくれました。今読み返しても、阿久悠さんは選手の心の中まで入り込んで、心情をすべて把握されていたのだと思います。

※阿久悠 放送作家・詩人・作詞家・小説家（1937～2007年）。日本レコード大賞受賞曲は歴代最多（5曲）。紫綬褒章・旭日小綬章受章。
5連続敬遠を淡々と受け止める姿を見て感動した作詞家・阿久悠氏が書き贈った詞

今でも語り継がれる明徳義塾高校戦での5連続敬遠。「敬遠は悔しくない。負けたことが悔しい」と語った



写真：読売新聞社

甲子園の詩

敗れざる君たちへ

阿久悠 作

あなたは たぶん
思ひごとを云ったり
作戦を練ったりはしないだろう
無念さは おそらく
青春期の過渡期のような形で
ほろりと噴出を待っているだろうが
あなたは それを制御し
次なる人生への動機にし
エールボールにしてしまいに違いない

感情を小出しに爆発させ
その時その時の調整をくり返し
如何にも活力あり気には振舞う人とは
あなたは スケールが違う
ドンと受けとめて
いつか やがて
まるでこの日の不運が
最大の幸福であったかのように
変えてしまうことだろう

バッターボックスの中で
激動だにしなかつた態度を修める
グライディングに便乗しなかつた見守り心
何よりも立派だと賞める
照れたり くさったり 呆れたり
同情を求めしぐさを
大片も見せなかつたことを賞美する
一振りも出来ないまま
一塁ベースに立ち
瞑想していた男の顔を
抱き抱れと見る

あなたの夏は
いま 無念の夏かもしれないが
涙の中で自分を失わない
堂々の人間を証明してみせた
圧倒的に
輝く夏だったのだ



人間万事塞翁が馬。 プロとして最後に結果を出す

宗岡 1992年ドラフト1位指名で読売巨人軍に入団。入団2年目から1軍に定着しましたが、1年目は2軍スタートでオープン戦でも結果が出ず大変苦労されたように思います。最初の1年ほどのような状況だったのですか。

松井 高校とプロの違いを、身をもって感じました。甘い世界ではないことを痛感して、練習しなければと素直に考えられたので、今振り返るとよかったと思います。当時父がFAXで「人間万事塞翁が馬」という故事を書き送ってくれました。人間にとつて何が幸いで何が災いか表面的な現象だけではわからないというこの言葉は、

その後の野球人生でも心の支えになりましたね。そして1年目の後半、チームの優勝が厳しくなった8月頃から「打てなくてもいいから」と1軍でプレーする機会を与えていただき、少しずつ結果が出て自信がついたことが2年目につながりました。

宗岡 その後数多くのタイトルを獲得され日本球界を代表する選手になりましたが、50本打って本塁打王になった2002年のシーズン終了後、FA宣言してメジャーリーグのヤンキースに移籍された。99年にご自身でヤンキーススタジアムの試合を観戦されたときの感動が後押ししたように思います。ただ私も含め、日本の野球ファン、関係者の思いは複雑でした。そのときの心境はいかがでしたか。

松井 確かに心苦しい気持ちでした。巨人軍の4番は責任のある特別な立場で、それを背負っている自負もあったので、自分がやりたいからと言って簡単に別の道を選んでよいのかと最後まで悩みました。難しい決断でしたが、最初に伝えた長嶋監督からは何度も気持ちを確認されましたが、最後は「決めたならやってこい」と背中を押してくださった。自分も決断した以上は命を懸ける覚悟でした。

宗岡 巨人軍の新人時代から続いた、日米通算1768試合連続出場記録からも、松井さんの責任感の強さが伺えます。

松井 長嶋監督から「みんな松井を見に来るんだ。そういうファンをがっかりさせてはいけない」と、巨人軍の4番打者としての心構えを教わりました。連続試合出場には、こうしたファンのためという気持ちがあったのは間違いありませんが、ただもともと単純に、野球をして遊ぶときに仲間で打席を取り合ったように、すべての試合に出たいという気持ちが根本にあったと思います。



巨人軍時代に毎日続いた長嶋監督との素振りや、アメリカでのプレーを支えた。技術論だけでなく、「毎日試合に出て全力でプレーし、紳士的に振る舞え」と、一流選手としての姿勢を学んだ



写真：Thomas Anderson／アフロ



宗岡 先日ヤンキースタジアムを訪れる機会がありました。そこにかつての名選手が顕彰されている。「ヤンキースの一員になった幸せを神に感謝する」というジョー・デイマジオ(※)の言葉が印象的で、素晴らしい歴史と伝統、成績を見て、間違いなく大リーグ一のチームだと実感しました。松井さんは常々大切なのは個人タイトルよりもチームの勝利、For the teamだと言われていますが、スター選手が勢揃いしたヤンキースでは個人主義も強いのではないですか。

松井 少なくとも僕がいたときにそう感じた選手は一人もいませんでした。全員、チームが勝つために最善を尽くすことを目標としていた。チームに誇りを持っていたと思います。特に親交のあるデレク・ジータ選手は、プレーから日々の生活、振る舞いに至るまで、それを体現した紳士だと思いますね。

自分がコントロールできることに集中。 あとは全力を尽くすだけ

宗岡 その後2006年に左手首を骨折し、08年以降は持病の膝痛が悪化するなど厳しい時期が続きました。ミュージウムで当時のギブスを見ましたが、3年間の困難を乗り越えて09年ワールドシリーズで優勝し、ご自身もMVPを獲得されました。そうした「不撓不屈」の精神はどのように培われたのでしょうか。

松井 まず単純に野球が好きだった。好きな野球に真摯に取り組み、そして勝ちたい。そのために自分は何をすべきかを、怪我の時期も含めて常に考えてきました。確かに怪我をしたのは残念で、正直なところ前向きであることが難しい時期もありましたが、しっかりと治せば以前よりもっと優れた選手になれるという気持ちで、日々自分ができていることに集中しました。長嶋監督の「リハビリは嘘をつかない」という言葉も励みになりましたね。

宗岡 怪我からの復帰戦やワールドシリーズでも、ここぞというときに打つ。私の記憶では天覧試合(※)のような大舞台で打つ長嶋監督と松井さん、お二人がずば抜けてチャンスに強い選手だと思います。先ほどのお話にあった冷静な「平常心」に答えがあるように思います。

松井 確かに周りの選手やファンの方々が手に汗を握るような展開でも、バッターボックスの中ではかなり冷静ですね。点差やランナー、ピッチャーのタイプなどそのときの状況を把握して、自分は今何に集中したらよいか、自分がコントロールできることを考える。過去の出来事はもちろん、周りの意思や期待、雰囲気などは



写真：時事通信社



写真：ロイター／アフロ

怪我を乗り越えワールドシリーズ優勝、自らもMVPを獲得



※ジョー・デイマジオ 1914～1999年。兵役期間を除いてヤンキース一筋13年(うち9回ワールドチャンピオン)。歴史上最も優雅な外野手と呼ばれる、56試合連続安打の大記録を持つ。

※天覧試合 天皇ご臨席のもと行われる武道・スポーツの試合。1959年の巨人対阪神戦で、長嶋茂雄選手がサヨナラ本塁打を打ち、これ以降、プロ野球が日本を代表する人気プロスポーツとなった。



自分でコントロールできませんから。あとは普段から、肝心な場面で確率の高い打撃ができる備えを心がけています。

宗岡 バッターボックスで蟻地獄のように自分の狙ったボールを静かに待つ。平常心で冷静な顔をしてバッターボックスに立たれるとピッチャーも嫌で、逆にプレッシャーを感じて失投してしまうのですね(笑)。バッ

ターの真髄を見た気がします。

松井 基本的にこちらがチャンスときは向こうがピンチです。相手のピッチャーのほうが浮足立つ要素は多いのに、周りの期待がプレッシャーになるバッターも多い。冷静に考えると、厳しい状況にある相手に対してこちらは普段通りやっていけばよいのだと思います。

米国の野球ファンやチームメイトが見守る中で行われた、ニューヨーク・ヤンキースの引退セレモニー(2013年7月)

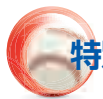


写真：AP/アフロ

ファンにはいつも笑顔で応対。アメリカでも子どもたちからの人気は高かった



写真：時事通信社



今は夢の途中。 意欲をかき立てる目標を見出したい

宗岡 もう一つお聞きしたいのは、ミュージアムや著作で垣間見た、野球選手の松井さんだけではない「人間・松井秀喜」の魅力です。弱冠18歳の巨人軍の入団会見では、「球界を代表する打者になりたい」というようなコメントをする選手が多い中で、「子どもたちに夢を与える選手になりたい」と発言。また病氣の子どもや被災者への支援、ベトナムの恵まれない子どもたちの里親になるなど、独自在チャリティ活動を続けられている。国境を越えた松井さんの幅広いファン、そして国民栄誉賞受賞の背景にはそうしたお人柄もあると思います。

松井 自分がやれること、やるべきことをやってきただけです。特に怪我のときは、ニューヨークの日本人学校や病院に行って子どもたちの笑顔を見ることが、逆に励み勇気をもらいました。

宗岡 私も縁あって全柔連の会長を引き受けましたが、松井さんは選手として引退されてもまだまだ夢の途中で。すね。今後はどのようにされていくのですか。

松井 現役のときはその時々が夢が明確でしたが、今は正直なところおぼろげです。さまざまなオファーをいただき感謝していますが、まず自分の意欲をかき立てる何かを見出したい。やはり野球・スポーツから完全に離れることはないと思いますけれど。

宗岡 最後に、最近日本の若者にはチャレンジ精神がないと言われますが、何かメッセージを。また日本の企業

は現在、成長するグローバル市場に向けて事業展開を進めています。日本を飛び出し、大リーグというグローバルな舞台で頑張りを抜いた松井さんから、海外の第一線で働く人たちに向けてエールをいただければうれしく思います。

松井 以前に比べて今は、「夢や目標」を見つけない社会環境になったような気がします。夢さえ持てれば時代に関係なく、子どもも成長過程で自然に志が持てるようになると思います。そして大人がそのステージを壊さずにサポートすることも重要です。自分の息子に対しても野球を無理矢理やらせるつもりはありません。何事もまず本人が興味を持つことが大切だと考えています。

また海外で活躍されている日本企業の皆さんは、生活面など仕事以外のことも含めて大変ご苦労されていると思います。僕自身は Yankees の選手として恵まれた環境の中で、プレーすることに誇りと喜びを感じながら、日本でやってきた好きな野球、バッティングで結果を出すことに集中してきました。自分がなぜここにいるのかをよく理解し、そしてここにいることに感謝する気持ちがあれば多少大変なことがあっても乗り越えられます。そうした気持ちを持って皆さんにも頑張っていただきたいと思っています。

宗岡 今後の野球人・社会人としての松井さんのご活躍を期待しています。本日はありがとうございました。

(この対談は2013年10月12日、ニューヨークのフォーシーズンズ・ホテルで開催されました)

野球人・人間としての魅力満載

松井秀喜ベースボール ミュージアム



小松空港から車で約10分。1994年7月「松井秀喜 野球の館」として開館し、2005年12月に新築リニューアルオープン。少年時代から引退まで、思い出深い品々が展示されている。ワールドシリーズのトロフィーやチャンピオンリングも必見! 「野球を通して、『夢』を追いつけることの大切さを皆さんにお伝えできれば幸せです。近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください」(父・松井昌雄さん)

開館時間 9時〜17時(毎週火曜日と12月31日)

1月2日は休館、無料駐車場完備

入場料 一般/300円

小・中学生/100円

園児・幼児/無料

住所 石川県能美市山口町タ58番地

TEL 076112212447